



Title	増殖する〈語り〉：ドイツのテレビジャンル「デイリー・トーク」の文化的意味
Author(s)	横山, 香
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 205-217
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

増殖する<語り>

— ドイツのテレビジャンル「デイリー・トーク」の文化的意味 —*

横山 香**

Seit ihrem Sendebeginn im Jahre 1992 gewinnen die “Daily Talks”, die täglich am Nachmittag gesendeten Talkshows, bei denen Menschen wie du und ich über sich selbst “talken”, in Deutschland an Popularität. Sie gedeihen im dualen Rundfunksystem seit 1984, bei dem öffentlich-rechtliche und private Sender miteinander um Einschaltquoten in Konkurrenz stehen. Viele Kulturkritiker und Medienwissenschaftler werden aber zu harten Angriffen provoziert, weil sie die Themen der Daily Talks als für die Öffentlichkeit ungeeignet ansehen. Denn in den Daily Talks werden meist Privates oder Intimes, wie etwa “unnormale” Beziehungen zwischen Menschen oder deren “abnorme” Triebe, thematisiert. Die qualitativen Analysen über Talkshows zeigen jedoch, dass eine solche Kritik zu oberflächlich ist.

Die Daily Talks funktionieren als ein Feld, wo die dominanten Diskurse reproduziert werden und wo die gesellschaftliche Norm dadurch bestätigt wird, dass sie die Grenze zwischen Normalem und Unnormalem/Abnormem immer wieder deutlich werden lässt. Sie funktionieren zugleich auch als ein demokratisches Forum, wo Menschen, die bisher von der bürgerlichen Öffentlichkeit ausgeschlossen geblieben sind, sich aktiv und spontan selbst darstellen können und wo die Themen, die bisher nur als privat und deshalb als geringfügig angesehen worden sind, als öffentliche Angelegen-

* Der wuchernde “Talk” — Die kulturelle Bedeutung der Daily Talks in Deutschland —
(YOKOYAMA Kaori)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

heiten ernst genommen werden können.

In den Texten der Daily Talks, die ich in diesem Aufsatz analysiere, gibt es nicht nur die dominierenden, sondern auch die widerspenstigen Diskurse. Diese Diskurse machen die Texte der Daily Talks widersprüchlich. Fiske (1991) ist der Ansicht, dass die populärkulturellen Texte von Widersprüchlichkeit, Polysemie und Unabgeschlossenheit geprägt seien. Er findet in diesen Eigenschaften von Texten Momente, die, wenn auch nicht radikale, so doch allmähliche Veränderungen in der Gesellschaft hervorrufen könnten.

Die Veränderung der Gesellschaft ergibt sich jedoch nicht so einfach, da die meisten dominanten, populären Diskurse, die leicht von populistischen und konservativen Diskursen artikuliert werden können, unmittelbar mit unseren Identitäten verflochten sind. Und sie beruhen oft auf Geschichten, die eine Tendenz haben, das heterogene Andere zu beseitigen. Trotzdem möchte ich andeuten, dass der wuchernde "Talk" zu einer Politik führen könnte, die die Differenzen anerkennt.

はじめに

近年ドイツのテレビにおいて、トーク・ショーの一形態である「デイリー・トーク Daily Talk」が広範なポピュラリティを得ており、一種の社会現象となっている。デイリー・トークとは一般人がゲストとして出演する、週日の昼から夕方にかけて毎日放送されるトーク・ショーのことである。1992年にドイツで最初のデイリー・トーク RTL: "Hans Meiser"が始まって以来、現在ではおもな放送局のこの時間帯をデイリー・トークが席卷している状況である。

デイリー・トークの最大の特徴は、ごく平均的な普通の人々がメディアという公の世界で、彼／彼女の個人的なことについて、ときには「アブノーマルな」体験や性癖を語るところにある。それゆえ多くの批評家やメディア研究者は、デイリー・トークを「汚らしいテレビ番組 Schmuddel-TV」として非難や苛立ちを表

明してきたのである。

だがたんなる表面的な批判ではデイリー・トークの流行現象を把握することはできない。デイリー・トークのようなポピュラーなメディアは、それを社会的、文化的文脈のなかに置いてみて初めて理解し得るものである。本稿の目的は、デイリー・トークのテキストに見られる諸言説の分析を通じて、一般的な批判のうちにある価値基準の問い直しを含め、デイリー・トークが現代のドイツにおいてどのような文化的意味を持っているのかを問うことである。

1 トーク・ショーとその歴史

トーク・ショーを正確に定義するのは難しいが、基本的には「司会者が数人のゲストと任意のテーマについて語り合う会話主体の番組」¹⁾と定義することができる。

Erz (1998) はドイツのトーク・ショーの歴史を五段階に分けている²⁾。まず第一期は1953年から1971年まで、現在の“Der Presseclub”の前身であるARD: “Internationaler Frühschoppen”に代表される政治議論番組が中心であった時期である。これらの番組はジャーナリストが主体になって、政治的な意見を形成するための情報と教養を視聴者に与えることを目的としていた。第二期は1971年から1980年、アメリカを模範とする娯楽としてのトーク・ショーが始まった時期である。初期にはなかなか受け入れられなかったが、1973年にWest3: “Je später der Abend...”, 1974年にN3: “III nach 9”の放映が開始され³⁾大成功を収める。しかし第三期にはこれらの番組と平行して60年代的な情報主体のトーク・ショーが復活する。

第四期はいわゆる「二元放送体制 *duales Rundfunksystem*」が導入された1984年以降から1992年までの時期である。二元放送体制とは公共放送と民間放送が併存するシステムのことであり、前者は受信料をおもな財源とし、多様で質の高い番組制作を義務づけられているのに対し、後者は広告収入が財源で営業的な利益をあげることを目的としている。この二元放送体制において、ドイツのテレビは根本的に変化したと言われる。放送局間に競争原理が働き、番組制作は視聴率に

¹⁾ Eimeren und Gerhard (1998), S. 601.

²⁾ 以下、Erz (1998), S. 45-7を参考にまとめた。

³⁾ West3およびN はいずれも公共放送ARDの第三プログラムである。

左右されるようになった。公共放送もまたこの流れに巻き込まれざるを得なくなっている。もっとも二元放送体制が始まってすぐの頃にはトーク・ショーはまだ公共放送の「専門領域」であった。だが1988年には民放も娯楽主体のトーク・ショーの放映を開始する。その数が飛躍的に増加するのが1992年から現在までの第五期、すなわちデイリー・トーク全盛の時期である。デイリー・トークはアメリカでヒットしたトーク・ショー番組(“Donahue”、“The Oprah Winfrey Show”など)からそのコンセプトを得ているが、制作費が安上がりなうえ、ある程度の視聴率を得ることができるということで、類似の番組が次々と作られていったのである。

2 デイリー・トーク：内容と形式

デイリー・トークは主要民放 RTL、SAT.1、Pro7 および公共放送の ARD で午前10時半から午後5時まで、月曜日から金曜日までの毎日放送されている(表1参照)。番組名は司会者の名前がそのまま使われていることが多く、司会者がいわば番組の顔であり、番組のカラーも司会者によって決まる。たとえば RTL: “Hans Meiser” の視聴者の70%以上が49歳以上であり、Meiser の控え目で感情的にならないが人間的であるところがとくに年輩の女性に受けている⁴⁾。さらに年輩の人々に人気があるのが ARD: “Fliege” である。司会者の Jürgen Fliege は牧師であり、ゲストに対して感情的にも身体的にも接しながら悩みを聞く姿勢が特徴的である。一方若年層を対象としているものに SAT.1: “Jörg Pilawa”、Pro7: “Andreas Türck”、“Arabella” などがある。これらの番組は人間関係だけでなくファッションやライフスタイルなど、若者向けのテーマを設定している。

テーマ内容は人間関係がもっとも多く22,0%、次に家族15,6%、性格／生活様式15,2%、身体・美容9,6%と続く。デイリー・トーク批判的となっているセクシュアルなテーマは実はそれほど多くなく、全体の6%足らずである⁵⁾。ほとんどの関心領域はプライベートに関することであり、社会問題も扱われるが、個人的な立場から発言できるようなテーマが設定されている。政治、経済問題などのいわゆる「ハード」なテーマはほとんどない。

⁴⁾ Weiß (1999), S. 23.

⁵⁾ Laubsch (1998), S. 40参照。

表1 ドイツのデイリー・トーク番組(1999年9月現在)

番組名	司会者名	放送局	放送時間	98年の視聴者数*	視聴率**
Sabrina	Sabrina Staubitz	RTL	10:30-11:30	(新番組のためデータなし)	
Jörg Pilawa	Jörg Pilawa	SAT.1	11:00-12:00	0.71	17.8
Vera am Mittag	Vera Int-Veen	SAT.1	12:00-13:00	1.10	19.6
Sonja	Sonja Zietlow	SAT.1	13:00-14:00	1.48	21.5
Ricky!	Ricky Harris	SAT.1	14:00-15:00	(新番組のためデータなし)	
Birte Karalus	Birte Karalus	RTL	14:00-15:00	1.44	20.5
Arabella	Arabella Kiesbauer	Pro7	14:00-15:00	0.94	13.2
Bärbel Schäfer	Bärbel Schäfer	RTL	15:00-16:00	1.37	19.5
Andreas Türck	Andreas Türck	Pro7	15:00-16:00	0.98	14.0
Hans Meiser	Hans Meiser	RTL	16:00-17:00	1.75	20.0
Nicole	Nicole Noevers	Pro7	16:00-17:00	(新番組のためデータなし)	
Fliege	Jürgen Fliege	ARD	16:00-17:00	1.31	15.1

* 三歳以上の視聴者数。単位百万人。

** 視聴率(Marktanteil)は、その時間帯にテレビを視聴している全人口における割合を指す。単位%。

視聴者数、視聴率ともに1998年1月1日から10月31日までのもの。Eimeren und Gerhard (1998), S. 605から引用、資料出典はGfK-Fernsehforschung。

形式はどれも類似しており、あるテーマについてテレビ局側が募集したゲストが複数名登場し、それについて司会者とゲストが話すというものである。司会者の仕切りのもとでスタジオ見学者も発言することができる。

3 デイリー・トークに対する批判

ドイツのテレビ史を紐解いてもデイリー・トークほど論争的になってきたジャンルはないと思われる。道徳擁護の立場からは、デイリー・トークの話題はセンセーショナル志向であり、多くの青少年が視聴する昼間の番組内容として相応しいものではないとされる。それと同時にそのようなものを好んで見る視聴者の俗悪なぞき見趣味も批判される。精神医療の専門家からは、訓練を受けていない司会者による疑似セラピーの危険性が警告される。ゲストのデイリー・トーク依存症とでもいうべき徴候も存在するという⁶⁾。あるいはデイリー・トークにお

⁶⁾ Weiß (1999), S. 33-4.

けるディスカッションの浅薄さや、視聴者やゲストと司会者とのあいだのパラソーシャルな関係は、「現実」の議論文化や人間関係に何ら貢献するものではないという、「現実世界」とメディア世界との差異を強調する批判もある。また問題を論ずる上で、感情に訴えるやり方や、それらを個人に還元することは、社会構造のなかでそれらを理解する妨げになっていると主張する批判もある⁷⁾。

これらの批判のなかには表面的なものもあり、実証的な研究によって反証され得るものもある⁸⁾。また出演者や視聴者へのエスノグラフィックな研究は、自分が出演したことを積極的に捉えるゲストや、デイリー・トークを楽しむだけでなく批判的にも見る視聴者の像を浮かび上がらせている⁹⁾。

デイリー・トークがたんにセンセーショナルだからポピュラリティを得るというのはあまりにも単純化された見方である。次に実際のデイリー・トークのテキスト¹⁰⁾を分析することで、そこがさまざまな、ときには互いに対立しあう言説が錯綜する場となっていることを示したいと思う。

4 デイリー・トークのテキスト分析

事例(1):「自分の子どもを愛せない」(SAT.1: “Sonja”, 1998年8月3日放送)

母親が子どもを愛すること、つまり母性の存在は自明なことであると一般的には考えられている。だが「母性神話」とも言うべきもののイデオロギー性は、おもにフェミニズムによって暴き出されてきている¹¹⁾。それでも現在問題になっている虐待などの母親による「異常な行為」に対して、母性の欠落を嘆く言説が力を持っていることは事実である。

ゲストの女性K¹²⁾は自分の上の息子は愛せるが、下の双子の息子たちを愛せないと述べる。シングル・マザーでもあり、経済的な不安、双子が軽い障害を持

⁷⁾ Gleich (1998) にデイリー・トークへの批判がまとめられている。

⁸⁾ David and Mares (1998) はアメリカのトーク・ショーが青少年に与える影響を調査し、トーク・ショーが悪影響ばかりを与えとする批判は「極端だ」と結論づけている (p. 84)。Laubsch (1998) も、デイリー・トークがセックスに関するテーマをたんにセンセーショナルに扱っているわけではないことを実証的に示している。

⁹⁾ Livingstone and Lunt (1994), Priest (1995), Hoffmann (1998), Weiß (1999) などを参照。

¹⁰⁾ 以下のテキストの事例は、1998年8月3日から16日まで、オーストリア・クラゲンフルト大学メディア・コミュニケーション学研究所にて筆者が録画したデイリー・トーク・ショーの一部である。筆者が聴解不可能な方言や口語による発話は、ネイティブ・スピーカーの助けを借りて理解を試みた。

¹¹⁾ グループ・母性解読講座編(1991)参照。

っていることなどがその要因である。双子の面倒を見ている K の実母が登場し、みずからも母として涙ながらに「愛情を持たない母親なんておかしい」と訴える。子どもを失った経験を持つ女性も登場し「子どもは自分の分身であり、子どもを愛せないなら自分自身も愛せるはずがない」と述べる。親から愛されなかった子どもとして17歳の少女 N が登場し、彼女の心の傷が理解できるかと司会者は K に質問する。会場からも K に対する批判の声があがる。そして拍手喝采を浴びたのが、男性の「一度親子一緒にセラピーに通ってみてはどうか」という意見であり、K も複雑な表情でうなずく。

K の事例は典型的に支配的言説に収斂された例として見ることができるであろう。K はいくつか反論を試みるが、「愛情がない」という一点で完全な逸脱者として見られてしまう。彼女は道徳的というよりも精神的な逸脱者であり、治療の後には「正常な世界」へ戻ることができる存在として扱われたのである。

事例(2)：「『バイ』は両方手に入れる？」(RTL: “Ilona Christen”¹³⁾、1998年8月7日放送)

事例(1)とはまったく反対の事例がバイセクシュアルをテーマにした事例(2)である。ゲストは全員バイセクシュアルであるか、過去にそうであったかである。ゲスト全員に対して司会者は理解を示しており、またバイセクシュアル、あるいはゲイであることに対しての嫌悪感や非難はスタジオの雰囲気からは感じ取ることとはできない。ゲストの男性 S が、かつて男性と交際していたときに、両親がそれでも自分たちの息子であることには変わりはないと理解を示してくれた、と述べたときに会場から大きな拍手が起こる。ゲストの男性 D はベルリンで少年たちに外見がホモセクシュアル風だという理由だけで襲われ、ほとんど命を落とした体験を述べ、日常的なホモセクシュアルに対する差別や偏見への理不尽な思いを語る。

このトーク・ショーではバイセクシュアルという性的な「アブノーマルさ」を話題としているが、それを際立たせることによって性的なノーマルさ(ヘテロセクシュアル)の規範を強化しようとするような意図は見られない。むしろバイセクシュアル(あるいはホモセクシュアル)であることで受ける差別や人間関係の困

¹²⁾ 以下、各事例におけるゲストの名前はイニシャルで記す。実際の放送では司会者はゲストをファーストネームで呼び、テロップには姓はイニシャル表記される。

¹³⁾ 1999年7月で終了。5章参照。

難、アイデンティティの危機などの問題が真摯に扱われているように思われる。Priest (1995) によるアメリカのトーク・ショーに出演する人々を対象に行ったエスノグラフィックな研究では、性的なマイノリティが自分たちを認めてもらうために積極的にトーク・ショーを利用することが報告されている。この事例においてもゲストたちが積極的に自己表現する様子を見ることができる。

**事例(3)：「何のために働くの？ 母親になって児童手当を受け取る方がいい」
(SAT. 1: “Jörg Pilawa”, 1998年8月5日放送)**

前の二つの事例と違って、複雑なのがこの事例である。シングル・マザーで社会扶助だけで月々三千マルクという大金を手に入れている女性Jがメインゲストである。司会者が最初に彼女を紹介するときに、「僕はこんなことが良いことだとは思わない」と述べることで明らかなように、最初から批判されるべき立場としてJが想定されている。社会保障が手厚い、だが一方でそのために国民の負担も大きいドイツにおいて、メディアが社会扶助受給者を社会のお荷物的存在として描くことはよくあることである¹⁴⁾。

実際、スタジオ全体がJに対して敵意のようなものを持っている。見学席の若い女性、中年男性、中年女性が「働くべきだ」「国家を食い物にしている」等々次々と怒りながら彼女を批判する。Jの言い分は、「働きたいけれど働けない。両親は離婚してどちらも疎遠で子どもを預けることもできないし、幼稚園は空きがない、雇ってくれるところもない」というものだ。彼女を社会的逸脱者として際立たせるために、働くシングル・マザーたちや、家族計画をしっかりと行っている夫婦などが登場し、スタジオは拍手やブーイングなどで騒然となっている。だが見学席のある女性は、皆がJを批判するのは残念だ、なぜなら彼女はずっと家にいて子どもの面倒を見る、子どもにとっては「良き」母親だからだ、と発言する。これには働くシングル・マザーが反論し、司会者も「良い母親、悪い母親が今の問題ではない」と仕切る。

このような数々の意見が、もともとは社会のお荷物として社会扶助受給者を批判する番組の意図を越えて、問題はそれほど単純ではないことを露呈してしまっ

¹⁴⁾ 社会保障は旧西独において戦後ずっと大きな政治的問題であり続けてきたが、とくに90年代になって、当時の与党であった保守政党キリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)が国家財政の建て直しと雇用創出を理由に福祉水準の切り下げを押し進めてきたという経緯がある。メディアによる社会扶助の不公平感を煽る言説は、社会保障をめぐる国家政策とつながっていることに注意する必要がある。

ている。労働の倫理、母親の役割、父親の役割、女性の社会進出、家族のあり方、国家の社会保障政策などについて、さまざまな立場からさまざまなことが言われている。ここで(とくに若い女性に)もっとも支配的なのは、家庭に入る伝統的な母親像ではなく、経済的に自立しながら子育てもするという女性像である。もっともこれは社会の現状を反映しているだけだと言うこともできるが、しかし非行などの社会問題の原因を「伝統的な家族の崩壊」に帰するような言説が一般的には相変わらず根強くあることを考えれば、むしろ「進歩的」な女性像であると言うことができる。だがその進歩的な言説がここでは、社会福祉よりも自助を支持する、政治的には保守的な言説と節合している。結局このトーク・ショーは結論が出ないまま、そしてJが改心する様子もないまま、終わってしまう。

Fiske (1991)はポピュラー・カルチャーのテキストを意味をめぐる闘争の場とみなしている。これはポピュラー・カルチャーのテキストがつねに、支配的な権力やイデオロギーと、それに抵抗したり逃れようとする力との緊張状態にあることを意味している¹⁵⁾。デイリー・トークのようなポピュラー・メディアのテキストは、一方では逸脱者／アブノーマルを際立たせることによって、支配的な常識や社会規範を再生産し強化する統制的な機能を持つ。事例(1)のケースがそうである。しかし一方では、事例(2)のように逸脱者／アブノーマルを際立たせることで、逆に支配的な言説に対抗するような言説を生みだすこともある。そして事例(3)のように、さまざまな言説が絡み合って、社会的には進歩的な言説が、政治的には保守的な言説と節合するような形になる場合もある。

もちろんそこから視聴者が何を讀みとるかは別の問題である。だがデイリー・トークのテキストを、支配的な言説と対抗的な言説、進歩的な言説と保守的な言説とが錯綜する、矛盾に満ちた、だがそれゆえさまざまな主体の位置からのさまざまな解釈が可能な場として見ることはできるのであろう。

5 公的領域への侵入？

デイリー・トークがもっとも問題とされる点はおそらく、一般人の私的な事柄がテレビという公の領域に「侵入」していると感じられているところにあるだろ

¹⁵⁾ Fiske (1991), P. 5. 邦訳、14頁。

う。Mikos (1998)はこの一般人を「社会的、経済的理由によって市民的公共領域 *bürgerliche Öffentlichkeit* の啓蒙された理性的な諸言説のコードを持たなかったために、そこからこれまで閉め出されてきた人々」¹⁶⁾としている。もちろん一般人がこれまでテレビという公的領域に登場しなかったわけではないが、彼／彼女らが自分たちのことばで、積極的に、そして自発的に、みずからを演出し、語る場所としてテレビがあったわけではない。この意味ではデイリー・トークはより民主化されたフォーラムとして機能していると評価することもできる。

また公的／私的事柄については、Fraser (1992)がドメスティック・バイオレンスの例をあげて指摘しているように、その境界は決してア・プリオリなものではなく、したがって「どんなトピックも言説的な論争に先だって排除されるべきではない」¹⁷⁾ことを念頭に置いておく必要がある。そしてそもそも個人的、私的な事柄でさえ「政治的に形成されてきた」¹⁸⁾ことを考えれば、ただ個人的、私的だからという理由だけでデイリー・トークのテーマをタブー化したり、取るに足らないこととして批判できなくなるだろう。

たとえば事例(2)のバイセクシュアルというテーマは、たんなる個人的な性的嗜好の暴露にとどまるものではない。つまり社会的には「正常」とされる、近代の家父長制社会における婚姻制度と結びついたセクシュアリティのあり方を考えるきっかけとしてそれを見ることもできるのである。たえもとはセンセーショナルリズムの産物であっても、そのようなテーマが性についての規範や社会通念を変えていく契機になる可能性もあるのである¹⁹⁾。トーク・ショーが人々にみずからを語る場を提供し、それが意図せざることにせよ、また直接的でないにせよ、政治や社会についての議論となる可能性があることは、すでにアメリカやイギリ

¹⁶⁾ Mikos (1998), S. 446. 引用中の「市民的公共領域／性／園」の概念は Habermas (1990) の議論を踏まえたものである。しかし本稿においては「公的領域」を Habermas 的な意味ではなく、メディアを含めたより一般的な「公の場・空間」といった意味で使っている。Habermas によれば今世紀のマス・メディアによる公共圏はすでに理想的な意味での市民的公共圏ではもはやなく、「見かけ上の公共圏」(Habermas (1990), S. 261) にすぎない。たえそこで政治的な討議がなされていても、それは演出されたものであり、公論としての機能は果たしていないとされる (S. 252)。この議論にここでは立ち入らないが、この概念に対する批判をまとめてあるものとしては阿部 (1998) を参照。

¹⁷⁾ Fraser (1992), p. 129.

¹⁸⁾ 井上 (1999) による Charlotte Mary Brunson の発言より引用。Brunson はフェミニズムの "Personal is Political" のスローガンについて発言をしている。

¹⁹⁾ もちろん逆に、「正常な」性規範を強化することになる可能性もある。

スにおいては認められつつある²⁰⁾。

もっとも Mikos (1998) は、ドイツの状況がまだそこには至っていないと指摘する²¹⁾。デイリー・トークの司会者であった Ilona Christen も、現在のデイリー・トークが視聴率をめぐる「諍いを起こして」質を低下させていると批判し、センセーショナリズムに乗ずる制作者側や視聴者に疑問を呈して、結局6年続いたみずからの番組をうち切った²²⁾。事実、話題づくりのために犯罪者を登場させるなど、民間放送およびテレコミュニケーションサービス連盟 (VPRT) が定める行為規範に違反する例も報告されている²³⁾。ドイツのデイリー・トークが今後どうなっていくのかはまだわからないが、デイリー・トークに対する批判には、その両義性を慎重に見極める視点が必要である。

6 増殖する〈語り〉の可能性

ここまで見てきたように、デイリー・トークが社会を、決してラディカルにではないにせよ、変えていく可能性はあるとすることができるだろう。しかしながらそこに現れる言説の多くは支配的な社会通念と結びついたものである。そしてそのような言説は、本当の自己、真の愛情、正しい生き方といった確固たる意味や本質、あるいは秩序感覚をわれわれに与えるような「物語」に基づいている。そのような物語はわれわれのアイデンティティと直接に結びついているだけにより強固なものである。たしかにそれらが自分自身に力をつけることにつながるという意味では積極的に捉えられるものである。しかしその物語は同時に、異質な他者を排除したり差別することによって成り立つ危険性をもつねに孕んでいるのである。

「伝統的」な家族や共同体の解体、宗教、言語、習慣、肌の色の違う民族の流

²⁰⁾ Livingstone and Lunt (1994), Priest (1995) 参照。また McRobbie (1999) は、イギリスで起こった十代の女性のセックスやドラッグ使用の社会問題について、彼女らとその代弁者の女性らがトーク・ショーなどで積極的に発言することで、保守党議員らによる女性たちへの中傷キャンペーンが失敗したという出来事に言及している。

²¹⁾ Mikos (1998), S. 450.

²²⁾ B.Z. (1998年11月2日付): 'Die Publikumsbeschimpfung. Jetzt von Ilona Christen'.

²³⁾ 1998年11月に放映された RTL: "Birte Karalus" が少年犯罪者を出演させたことは、民間放送およびテレコミュニケーションサービス連盟 Verband der Privaten Rundfunk und Telekommunikationsanbieter (VPRT) が定める行為規範 Verhaltenskodex を守っていないものとして批判された (Eimeren und Gerhard (1998), S. 600 参照)。前述の Ilona Christen も "Birte Karalus" がトーク・ショーの評判を貶めた」と批判している (B.Z., 1998年11月2日付)。

入、文化のグローバル化という名の商業化・アメリカ化などによって象徴される戦後のドイツ社会において、「ドイツ的」な価値や規範、あるいはドイツ人としてのナショナル・アイデンティティといった「神話」は目に見えるかたちで切り崩されてきた。このような危機的状況では、なおさらこのような物語は必要とされてきたし、繰り返し語られてきた。

しかしデイリー・トークにおける人々の〈語り Talk〉は、客観的な「ひとつの真実」に収斂されてはいない。それはむしろ「たくさんの主観的真実 viele subjektive Wahrheiten」²⁴⁾を日々産出している。この増殖する〈語り〉が、それらに耳を傾ける姿勢をも同時に引き起こすことができるならば、「差異を容認するポリティクス」²⁵⁾へとつながる可能性は存在するということは、少なくとも示唆できるのではないだろうか。

引用および参考文献

- 阿部潔(1998)『公共圏とコミュニケーション 批判的研究の新たな地平』ミネルヴァ書房。
- Davis, Stacy and Mares, Marie-Louise (1998) 'Effects of Talk Show Viewing on Adolescents'. In: *Journal of Communication* 48, 3/1998, pp. 69-86.
- Eimeren, van Birgit und Gerhard, Heinz (1998) 'Talkshows — Formate und Zuschauerstrukturen'. In: *Media Perspektiven* 12/1998, S. 600-7.
- Erz, Katharina (1998) 'Brot und Spiel? — Die Talkshow'. In: *tv diskurs* 5, 7/1998, S. 44-50.
- Fiske, John (1991) *Reading the Popular*. London, New York: Routledge, first published 1989, Boston: Unwin Hyman. (邦訳(1998)『抵抗の快楽 ポピュラー・カルチャーの記号論』山本雄二訳、世界思想社。)
- Fraser, Nancy (1992) 'Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy'. In: Calhoun, Craig (ed.)(1992) *Habermas and the Public Sphere*. Cambridge, Massachusetts and London: The MIT Press.

²⁴⁾ Mikos (1998), S. 439.

²⁵⁾ Plummer (1995), p. 148, 邦訳315頁。Plummer は、他者を同化するか排除する「伝統的政治」に対し、新しい「差異の容認のポリティクス」は、人々や集団や諸経験の「差異はどこにでもあり、単純に組み込むことができないと認める」「挑戦的な政治」であるとしている。

- Gleich, Uli (1998) 'Talkshows im Fernsehen — Inhalte und Wirkungen, Zuschauer- und Kandidatenmotiv'. In: *Media Perspektiven* 12/1998, S. 625-32.
- グループ・母性解説講座(1991)『母性を解説する』有斐閣。
- Habermas, Jürgen (1990) *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. Neuauflage, Frankfurt am Main: Suhrkamp, zuerst 1962. (邦訳(1994)『公共性の構造転換 第二版』細谷貞雄・山田正行訳、未來社。)
- Hoffmann, Andrea Claudia (1998) *Öffentlichkeit als Therapie? Zur Motivation von Daytime-Talk-Gästen*. München: KoPäd.
- 井上輝子(1999)「ジェンダー・アプローチの課題と有効性」、花田達朗他編(1999)『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社。
- Laubsch, Annette (1998) 'Nur Sex und Crime in Daily Talks?' In: *tv diskurs* 5, 7/1998, S. 40-3.
- Livingstone, Sonia and Lunt, Peter (1994) *Talk on Television. Audience Participation and Public Debate*. London, New York: Routledge.
- McRobbie, Angela (1999) 'Changing Cultures of Femininity in Contemporary Britain'. 邦訳「現代英国における女性性の文化の変容」(小川葉子訳)、花田達朗他編(1999)『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社。
- Mikos, Lothar (1998) 'Die Inszenierung von Privatheit. Selbstdarstellung und Diskurspraxis in Daily Talks'. In: Willems, Herbert und Jurga, Martin (Hrsg.) (1998) *Inszenierungsgesellschaft*. Opladen, Wiesbaden: Westdeutscher Verlag.
- Munson, Wayne (1993) *All Talk. The Talkshow in Media Culture*. Philadelphia: Temple University Press.
- Plummer, Ken (1995) *Telling Sexual Stories. Power, Change and Social Worlds*. London, New York: Routledge. (邦訳(1998)『セクシュアル・ストーリーの時代 語りのポリティクス』桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳、新曜社。)
- Priest, Patricia Joyner (1995) *Public Intimacies. Talk Show Participants and Tell-All TV*. Cresskill: Hampton Press.
- Weiß, Andreas (1999) *Wer sieht sich das nur an? Den Zuschauern von Daily-Talkshows auf der Spur. Eine Rezipientenbefragung*. München: Verlag Reinhard Fischer.